

## 皇子たちはなぜここまでトゥーランドットに惚れたのか？

情報工学科 2年 飯塚健太

今回は主人公、カラフがなぜ、トゥーランドットに惚れ込んだのかについて考えてみたいと思います。

カラフは第1幕のペルシャの皇子の処刑の手前では、若くて美しい彼を見て、群衆と共に恩赦をと求め、「ああ、何という非情な姫だ。姫といえど、罵声をあびせてやりたい」とトゥーランドットを非難します。その直後、カラフはトゥーランドットを目の当たりにします。カラフは「あの神々しい美しさ。あれは奇跡か、それとも夢か。この世ならぬ美しさよ。」と称賛し、一瞬で彼女に惚れ込みます。カラフの様子がおかしいのに気付いた、父のティムールと奴隷女のリュウは彼にどうしたのか尋ねると「感じませんか、姫の香を大気の中に、心の中に。ああ、あの妙なる美しさ。」と答えます。二人はこのままでは、カラフが謎に挑戦し、処刑されてしまうと思い、彼を必死に説得しますが彼の心はここに有らず、「私の人生はここにあります。トゥーランドットと共に。」と言って聞く耳を持ちません。その後、三大臣のピン、ポン、パンもこれ以上の流血を防ぐため、彼を説得しますが効果はあらず、彼は銅鑼を叩き、トゥーランドットに謎の挑戦を申し出ます。

この時点でおかしな点がいくつかあります。まず、ほんの一瞬見ただけで、惚れ込み、その女性と命をなげうってでも一緒になろうとするのはいくらなんでも非常識過ぎます。さらに実の父親やその父に献身的な女性の必死の説得、自分より姫を知っていて知性のある三大臣の説得に全く耳を貸さないという点から、正常な精神状態ではないことが伺えます。それは彼の「感じませんか、姫の香を大気の中に、心の中に。ああ、あの妙なる美しさ。」というセリフからも感じられます。これはもはや、変態の言うセリフです。一国の皇子の口から出る言葉だとは思えません。銅鑼を叩く前に、今まで首を切られてきた皇子たちの亡霊の声が聞こえている時点で正常な精神状態ではないことは確定です。

問題は”なぜここまで惚れ込んだか”です。カラフはトゥーランドットの姿を見た後、しきりに「香」というワードを連呼します。ここから推測するにトゥーランドットは特殊な香水を使用していたのでしょうか。人間をここまで異常な状態にするのですから、麻薬レベルの効果があると考えられます。しかし、香をある特定の人物だけに、遠距離からかがせることは簡単にはできません。実行にするにしても、大掛かりなトリックが必要になります。周りの男性、すべてが惚れさせるなら可能かも知れませんが、香水で皇子だけを惚れさせるのは難しいでしょう。では、どうやってトゥーランドットは皇子たちを虜にしてい

たのでしょうか？

第2幕でトゥーランドットは「祖先ロー・リン王女が私に乗り移り、各地の皇子に復讐をしている。」と言います。これはとても興味深いセリフです。彼女が本当にロー・リンの霊に取りつかれていたとすれば、皇子たちの心を操り、虜にし(霊なら、特定の人物の周りに香水の香りを運ぶことも可能)、殺された皇子の亡霊の声が聞こえる幻聴を聞かせることも可能でしょう。しかし、ロー・リンにとって大きな誤算だったのが、カラフが3問の謎のすべて正解してしまったことです。これによって、彼女はカラフを処刑することが出来ませんでした。第3幕の最後にカラフがトゥーランドットに迫り、無理やりキスをすると彼女はその場に崩れ落ちてしまいます。そして、彼女は我に返ってのように「どうしたこと？敗れたのか？」と言います。これが彼女に憑いていたロー・リンの霊が彼女から出て行った証拠ではないのでしょうか。おそらく、ロー・リンの霊はカラフのキスによって、自分の過ちに気づき、トゥーランドットを解放し、成仏することを決めたのでしょう。